

An abstract painting featuring a central blue shape with a red, crescent-like form inside it. The background is a mix of yellow and green. The text is overlaid on the blue shape.

即興小説
セレクション

エリートというのが「選ばれた人」という意味なら、彼はまさしくエリートだった。成績は常にトップクラス、容姿端麗で明朗快活、非の打ち所のない存在だった。でも私が愛したのは、彼がエリートだったからではない。彼はエリートだったけれども、私が愛した理由はそこにはなかったのだ。

「ねえ、あーたん、ぼくの靴下どこにいった？」
今日も彼は甘えた声で私に問いかけてくる。
靴下はタンスの一番下だと何度いえば覚えるのだろうか。
学術的な知識はどれだけでも詰め込めるのに、生活に必要な知識は一切記憶できない。
こんなに手のかかる人、見たことない。
何度ため息をついただろう。でも、そこがたまらなく魅力的なのだからしかたない。
私は人生のすべてを彼に捧げて、全身全霊で彼を愛する。

彼が人間だったらよかったのに、と思わないわけではない。でもそれは言っても詮無いことだ

。

全宇宙との交易が一般化して、たくさんの宇宙人が地球へ移住してきた。

原住民である地球人よりはるかに優れた能力を持った宇宙人が、地球を支配するようになるのにたいした時間はかからなかった。

私はしががない地球人だけれど、同じ地球人同士でつながるつもりはまったくなかった。

彼はエルメダス星から来た。エルメダスこそ私がずっと憧れていた星なのだ。

たまたま彼はエリートだったけど、たとえエリートでなかったとしても私は彼を愛しただろう

。

彼は今日も靴下をさがす。たくさんの足に履かせるたくさんの靴下を。

タンスの引き出しは靴下でいっぱいだ。

まあ、あれだ、あの結末は最初っからわかってはいたんだ。
だってそうだろう、あれで俺がそのまま残ってたら絶対おかしいって。
だから俺は姿を消すしかなかったのさ。

そんなに同情してくれなくたっていいんだよ。そんなに辛かったわけじゃない。
そろそろ引越したいなあとも思ってたしね。いいきっかけになったってんだよ。

いやいや、別に正義感からってわけじゃないさ。ただ、あいつはほんとに人を恋しがってた。
心底寂しがり屋だったんだろうな。俺たちは本来、単独で生活する種族だ。「ひとりがさびしい」
とか「誰かと仲良くしたい」なんていう感情があるほうが異質なのさ。
しかも相手は人間だろう？　なんで人間なんかと仲良くしたいと思っちゃったんだろう。

……、ああ、あれか。人間の世界でも、異質なものに惹かれてしまうという現象があるって
いうじゃないか。人形だの、動物だの、物だの、そういったものに愛情を持ってしまう。
そういうのと同じだったのかもしれないなあ。

でもな。あいつはあんなご面相だろう？　ほっといたらどうにもならないってことくらい、俺に
もわかってたさ。人間は心が小さいから、あいつみたいな存在を受け入れることがとてもむずかしい。
だから一計を案じて、俺が一肌脱いでやったってわけだ。

やる前は、うまくいくとは思ってなかった。だってそうだろう、あんなうそ臭い設定、ふつーあり
えないって。ベタもいいとこだって思ったんだけどさ、あいつにはこれくらいベタじゃないと
芝居できないってこともわかってた。

ああ、そうだ。ほんとにあいつは、赤ん坊みたいに無垢で純粹で、不器用なやつだったんだよ
。

俺をやっつける芝居をするときでも、泣きそうな顔をした。
「そんな顔してたらバレちまうぞ」
って怒ったんだけど、それでも唇の端っこが歪んでた。
ほんとはもうちょっと込み入った筋書きを考えてたんだけどさ、あれが限界だったね。

俺は別に一人でいたって寂しいと思うことはない。そういう感情ははなっから持ちあわせてい
ないのさ。だから、あいつともう会えなくなっちゃったことを、そう残念がってくれなくても
いい。

今になって思い返せば、あの三文芝居でよかったんだな、と思うよ。あれのおかげで、思いの
外俺の株も上がったみたいだし。

なあ。

ベタな展開っていうのも、悪くないよな。

俺たちは、発生の中からずっとこの運命を背負ってきた。

ひっそりと身を隠し、闇に乗じて乗り移る。

悪いことをしているわけじゃない、といつも思う。ただどうしようもなく、そういう性質を持ってしまっているんだ。

ふつうの増殖には関われない。それは俺たちのやり方じゃない。

それでも消えないでずっと継続されてきたのだから、きっと何か意味があるんだろう。どういう意味があるかを考えるのは宿主の仕事。

寛容な社会で存在できた仲間は、とてもものびのびと暮らしているらしい。

不寛容な社会に出てきてしまった俺は、とても抑圧されている。

どうして俺たちみたいなのが生き残ってるんだろうな。

きっと、たぶん、多様性とかそういう方面で必要があったんだろう。

これはこれでいいもんだと思うぜ。純粋な愛ってやつについて思考するチャンスを与える。

見たところ何も変わらない。でも確実に俺たちが混じった血は深い思考を連れてくる。

ほら、受け取れよ、この複雑で美しく純粋な液体を。

寄り道

窓の外で、おかしい具合に光が走った。

「ん？ 雷か？」

佐竹が、パソコンを叩く手を止めて窓の外を見た。

「まさか。だって青空だぜ」

俺がそう言うと、佐竹は首を傾げた。

「確かにそうだな。でも今、変な色の光が走らなかったか？」

俺は努めて動揺を押し隠して、そらっとぼけた。

「気のせいだろ。それとも、パソコンの見過ぎで眼精疲労でも起こしたんじゃないか？」

佐竹は単純な男だ。「そうかもな」とつぶやきながら、再びパソコン画面を見つめ始めた。

ふう、危ない危ない。あれに気づかれたらちょっと面倒くさいことになるところだった。

「じゃあ、俺は先にあがるぜ。お前も適当なところで切り上げろよ」

「ああ」

生返事を返す佐竹を残して、俺は会社を出た。

次第に小走りになる。急がなくては。俺は駅へ急いだ。

電車を乗り継いで、郊外の駅まで行く。駅前から出る、1時間に1本しかないバスにかろうじて飛び乗ることができた。

バスは、ひなびた駅前を出発し、どんどん山奥へ進んでいく。俺の目的地はバスの終点からさらに30分ほど歩いた場所だ。

山のどこかで、鳥の鳴き声がある。あれはなんという名前の鳥なんだろう。ついにわからないまま終わってしまうのが、ほんのちょっと残念だった。

竹やぶの中に入り込んで、笹の葉をかき分けながら進んだところに、ちょっとした広場がある。そこにはすでに連絡船が到着していた。

「おい、なんだかおかしい光が漏れてたぞ。整備不良なんじゃないのか」

俺はさっそく、連絡員に文句を言った。佐竹が気がついたくらいだから、もっと多くの人間たちに目撃されていたのではないだろうか。

「すみません。うっかりスリットが開いてしまって」

連絡員はしどろもどろになって言い訳した。

「なんでスリットなんかが開くんだ。いったい何をしていたんだ？」

「それが……」

突然、連絡員が激しく咳き込んだ。みるみるうちに顔面が真っ黒に染まっていく。なかなか止まらに咳に、連絡員は悶絶した。

「おい！ どうしたんだ！ しっかりしろ！」

「どうやら未知の生命体に侵略されたようです」

苦しげに連絡員がつぶやいた。

「未知の生命体？ そんなものがどこにいたというんだ。というか、おまえ、なんでそんなに顔面が黒いんだ。まさか？」

俺が連絡員の頬に手を当ててみると、張り付いてしまうほどの冷たさだった。表面に霜がついてしまっている。

「急いでその生命体を解析しろ！」

連絡員はよろよろと連絡船に戻り、解析装置を持ち出した。チェックスティックの先端を喉元に押し当てる。

数秒後に解析結果が出た。それを見て俺は仰天した。

「なんだって！ これは……」

俺が解析結果を見てうろたえていると、ふいに連絡員の体が激しく振動し始めた。そして、避ける間もなく、連絡員の口元から真っ青な液体が吹き出てきた。

「うわ！」

思わず飛び退いてしまう。連絡員は何度かえずき、そのたびに青い液体を吐き出した。

その液体の一滴が、チェックスティックにかかった途端、大きな音を立てて解析装置が動き始めた。

「……カイセキシウリョウ。イマノオウトハノロウイルスニヨルモノトオモワレル」

「……おまえ、どこかで寄り道してきただろ」

俺の冷たい声に、連絡員は申し訳なさそうな、照れくさそうな表情を一瞬浮かべ、そしてまた盛大に青い液体を噴射した。

その島に漂着したとき、船は3艘あった。ひとつは私が乗ってきた船、もう一つはあいつが乗ってきた船、そしてもうひとつは空のまま流れ着いた船だ。

私が乗ってきた船は小さく、よく見ると側面に小さな亀裂があった。まだ浸水してくるほどではないが、しかしこれは時間の問題だろう。

あいつが乗ってきた船は、私の船より一回り大きく、申し訳程度ではあるが屋根がついていた。あいつは屋根の下にもぐりこんで、強烈な日光を避けている。

島の端に生えてきた貧弱な木の幹に船をつなぎ、上陸してみる。あいつも同じようにして上陸してきた。

なるべく顔を合わせないようにして、島の中を探索した。綺麗な色の木の実が生っているのを見つけたが、草むらの向こうからあいつの目が光っているのが見えたので、2、3個とって、その場を離れた。

問題は空の船だ。私は島の周囲をくまなく探した。するとそれは、岩場の端にひっかかってゆらゆら揺れていた。今にも沖へ流れだしそうだったので、慌てて岩の上を飛んでその船に近づいた。

船の中を覗きこんで私はのけぞった。船底に異様な物体が横たわっている。強烈な臭気もたちのぼっていた。見た感じでは、数週間前に息絶えた誰かのようだ。

その物体が乗っているほかは、まったく異常が見当たらない船だった。オールもちゃんとついているし、穴もあいていないようだ。

私は、その物体から極力目をそらし、船を岩場からはずして、砂浜へ運んだ。

私の船には亀裂が入っている。その船で出発したところで、早晩、亀裂が大きくなって沈没してしまうだろう。とすれば、この船を使うしかない。問題は船底に横たわるこいつだ。

指先でちょっと触ってみると、ぐずり、と崩れる感触があった。無理だ。とうてい私にはこれを引き出すことはできない。

あいつに頼もうか。一瞬、そんな思いが胸をよぎった。

一度は否定した思いだったが、背に腹は代えられない。諦めてあいつを呼んでみた。

あいつはすぐさまやってきた。そして船底を覗きこんで呻いたが、思いの外てきぱきとそいつを船から取り出して砂浜へ横たえた。

「よく、そんなことができるな」

「……せめてもの罪滅ぼしだ」

「え？」

「同じ島に流れ着くなんて、こいつの執着もそうとうなもんだぜ」

あいつは、額に浮かんだ汗をこすりながら、口元を歪めた。

そして、あっと思うまもなくその船を海に引き出すと、勢い良くオールを漕ぎだした。

「おい！ ちょっと待てよ！」

呼びかけたが、みるみるうちにあいつの姿は遠ざかっていってしまった。

あとに残されたのは、私と、崩れかけた誰かの遺体だけ。

昼ごはんを食べて、ごろりと横になっているときだった。

「なあなあ、ちょっとこれ、見てみ」

やっちゃんが突然私の背中をつついた。

「なに」

私は振り向くのがめんどくさくて（お腹がいっぱい動きたくなかったのだ）、背中を向けたままうなった。

「なあ、こっち向けって」

やっちゃんはなおもしつこく私の背中をつつく。しかたがないので、トドのように寝転んだままごろりと向きを変えた。

「なによ、しつこいな」

そうやって私はちょっと言葉を失った。

やっちゃんは、セーターを胸までひきあげて、お腹を出している。

いくらエアコンで暖かいからって、腹を出すこたあなかろう。というか、なぜ今腹を出している？

「なにやってんの」

「ここ。ここ、触ってみ」

やっちゃんは、なぜかやたら嬉しそうな顔をして、自分のお腹のある1点を指さす。

「なに、どうかしたの？」

理由はわからないけど、どうしてもそこを触りたくなる衝動に襲われて、私はやっちゃんの腹の1点に手を伸ばした。

指先が触れた瞬間、私は叫んでいた。

「なにこれ！ チョ～気持ちいいんですけど！」

そう言いながら、私は手全体でやっちゃんの腹をつかんでいた。

ぷにぷにとした感触が、なんともいえず心地良い。それはたとえていうならば、……例えて言うならばなんだろう、たとえようがないぞ。極楽の心持ち、とでもいうんだらうか。脳みそがとろけてしまいそうなくらいの、圧倒的な快感が指先から全身に広がる。

「ちょっと……やっちゃん……これ、なんなの……」

私はあまりの快感に息も絶え絶えになりながら、問いかけた。

「わかんね。気がついたらこんなんになった」

やっちゃんはひどく嬉しそうに笑いながら私を見ている。

「これは……反則だよ」

際限なくやっちゃんの腹をぷにぷにしながら、私は恍惚感に浸っていた。

「なあ、おまえの腹も見せろよ」

「え？ なんで？」

私は快感を中断されたことにむっとした。なんで私の腹を見せなきゃいけないんだ。

「絶対、お前の腹にもあるって」

まさか。ゆうべ風呂に入った時に見たけど、なんにもなかったぞ。

「ないよ、こんな気持ちいいものがあつたらとっくに自分で触ってる」

「いや、これ、どうやら自分で触ってもあんまり気持ちよくないっぽい」

「そうなの?!」

「だからさ、おまえの腹も見せて見ろって」

私は半信半疑ながら、セーターをまくりあげた。どうってことない太鼓腹だ。いや、一つ段が増えてるかもしれない。

「お!!」

突然やっちゃんが目を輝かせて私の腹に手を伸ばした。

「ほら～、あるじゃん」

やっちゃんもとろけそう顔をして、私の腹をぷにぷにしている。

悔しくなって私ももう一度やっちゃんの腹に手を伸ばした。

二人でお互いの腹をぷにぷにしながら、いつまでも寝転がっていた。

「しあわせだよな～」

「うん」

愛ってこんな形してたんだな。

新製品

新しい電話が発売されたというので、友だちと見に行ってみた。

店先には長い行列ができています。その長さは新製品に対する期待度に比例しているようだった。

「おい、今度の電話はどんなんだと思う？」

そう、その製品は事前の告知がいっさいされていなかったために、誰もその全貌を知らなかったのだ。

「そうだなあ。まあ、常識的に考えて、今まで以上に便利な機能が搭載されたと思うぞ」

「たとえば？」

「う〜ん、なんだろうな。検索が今よりもっと簡単になるとか？」

「音声案内が自分でアレンジできるってのはどうだ」

「それはもうあるんじゃないか？ まあここであれこれ推測してもしょうがない。とにかく実物を早く見てみたいものだな」

「ああ」

行列は思ったより早く進んでいた。

店内に吸い込まれていく客は、あっという間に外へ出てくる。そして、一様に不可思議な表情を浮かべていた。

「なんであんな顔してるんだろう」

友人がげげんそうにいう。

「嬉しそう、というのもちょっと違う感じだぞ。いったいなにが起きてるんだ」

首を伸ばして店内を覗き込もうとしても、なぜかブラインドが降ろされていて内部をうかがうことができない。

「まあ、焦るなよ。この速さならすぐに俺たちの番が来るって」

そう言っている間に、俺達は店内に入ることができた。

「おまたせしました」

店員がにっこり笑う。

「新製品をお求めですか？」

「はい」

「では、こちらになります」

そうやって店員が取り出したのは、画鋏ほどの大きさの品物だった。

「これが電話？」

「はい。技術の粋を結集してできあがった、超高性能、超小型電話でございます」

「どうやって使うの、これ」

「はい、このようにして」

店員はいきなりその画鋏型の電話を俺たちの耳に差し込んだ。

「うわ！」

思わずのけぞったが、予想していたような痛みはまったくくない。

「どうやって電話をかけるの？」

「お客様が思うだけでいいのです」

「それだけ？」

「それだけです」

「メールは？」

「あー、そちらは別売りになります」

店員はもう俺達の方は見ていなかった。追い出されるようにして店を出た俺達は、微妙な表情を浮かべていたに違いない。

「まあ、ある意味、カッコいいのかも……な」

間違えたら消しましょう

席替えがあって、初めて君の隣の席になった。

今まで同じクラスだったのに、まともに口をきいたことがなくて、最初はちょっと戸惑った。君はいつも前だけを向いていたから。

きゅっと口元を結んで、張り裂けそうなくらい見開いた目で、黒板を見つめてた。

僕は君の横顔を盗み見ることしかできなくて、（柔らかそうな耳たぶだなあ）なんてことをぼんやり思ってた。耳の構造がけっこう奇妙だということに気づいたのはこの時だ。

君は、ノートをとるとき、必ず左手に消しゴムを握っていた。そして、字を消すときには、ノートが破れんばかりの勢いでゴシゴシこすっていた。

その激しさに、僕は密かにおののいていた。そんなに強くこすらなくてもいいんじゃないかな。

でも、それを口にだすことはできないでいた。

ある日、君の消しゴムがぽろっと折れた。

折れた消しゴムは、コロコロと机の下を転がった。

僕はすぐさま手を伸ばし、君の消しゴムの欠片を拾った。

「……ありがとう」

君は初めて僕をまっすぐ見て、小さな声でそういった。

「消しゴム……」

「え？」

「どうしてそんなに強くこすの？ ノートが破れちゃうよ」

いつも気になっていたことを思い切って言ってみた。

君は一瞬、何を言われているのかわからなかったらしく、口をとがらせて首をかしげた。

「そんなに強くこすってないよ」

でもそれは嘘だった。君のノートは、ところどころ、裏が透けてしまっている。

「間違えたらだめだから」

君はそれが答えの全てだとばかりに言い切った。

「だから消すの？」

「そう。間違えたらすぐに消さないと大変なことになるの」

それから何日かたったとき、僕は君を見て思わず叫び声をあげてしまった。

「ねえ！ 足が、足が消えてるよ！」

君はうっすら笑っていた。

「だって、間違えたらすぐに消さないと」

君の左手には特大の消しゴムが握られていた。

地球を出発したロケットは順調に航行を続けていた。

太陽系を抜けて、さらに進む。

何光年も飛び続けていると、やがて進行方向に見える惑星の配置が奇妙な形を作り始めた。

と同時に、船内にアラームが鳴り響く。

「キャプテン！ 前方に正体不明の物体が幅広く存在しています！」

「急いで解析せよ」

キャプテンは腕組みして計器を見つめた。

「わかりました！……しかし、これは……」

なぜか飛行士が絶句している。

「なんだ、早く報告せよ」

「それが……、これは、そう、たとえばいうなら、……ネットです」

「ネット？ なんだそれは」

「ネット、つまり網です」

「訳さなくてもわかる。私が聞いているのはなぜ宇宙空間にネットがあるのかということだ」

「わかりません」

「大きさはどれくらいだ」

「……計測不能です」

「なんだと？」

「ものすごく広い空間をネットが覆っているということだけはわかります」

「突っ切ることはできるのか？」

「それもわかりません。そもそも何で構成されているのかも不明です」

そのとき、別の飛行士が悲鳴を上げた。

「キャプテン！ 船体になにかまとわりついています！」

ロケットは徐々にスピードを落とし、ついにエンジンが停止してしまった。

頼りなく宇宙空間を漂うロケットを、なぞの網が優しく包み込む。何重にも重なって包み込まれたロケットは、やがて元の姿すらわからなくなってしまった。

森の奥、巨木の上に張り巡らされた蜘蛛の巣で、女郎蜘蛛はうまそうに獲物を食べていた。

ワンナイトキングダム

「そろそろ集まったんじゃないか？」

「あ、すいません、あと5人来てないんで、もうちょっと待ってもらっていいですか」

「5人……。ほんとに来るのか」

「いやあ、ラインに返事が来ないんすよねー。何やってんだろうな」

「らいん……」

「あれ、東さん、ラインやってないんすか」

「ああ、……うん、まだちょっとね」

「そうっすか。便利っすよ。通話もタダだし」

「そうなのか」

「あ、来た来た」

坂田がそう言ったので、誰が来たのだろうと東は首を伸ばした。しかし舗道には人影はない。

「どこにいるんだ」

「……あ？」

スマホに目を落としていたせいで、坂田の返事が一瞬遅れた。それがあたかも彼の不機嫌さを表しているかのように思えて、東はひやりとした。

「いや、来たっていうから」

「ああ、これっす」

坂田はそうやってスマホの画面を東の方に向けた。見たこともない画面が映しだされている。

「あー、うん、そうだな」

なにがそうなのかわからないまま、東は曖昧に答えた。

「すいません、東さん」

たいしてすまないと思ってなさそうな声で坂田が言った。

「4人来れないそうなんで。この1人が来るまで待っててもらっていいですか」

1人でも来るならいいほうだ、必死でそう自分をなだめながら東は、せいぜい威厳を保って見えるように頷いた。

坂田はもう自分の役目は果たしたとでもいうように、気楽な顔つきで店の入口を眺めている。

東もつられてドアを眺めながら、かつての華やかな日々を思い出していた。

あの頃はよかった。

そんなふうには思いたくなかったが、それはしかし、明白な事実だった。

この店が寂れてからもう何年になるだろう。東自身、長い間足を向けていなかった。それをこの坂田が企画して、一夜限りの復活と相成ったのだ。かつてのメンバーを探してくれたのも坂田である。連絡係にもなってくれた。あのころの仲間は200人をくだらなかつただろうに、その一人ひとりに丁寧な連絡をいれてくれた。

しかし、出席を約束してくれたのは、5人だけだった。

そしてそのうちの4人がドタキャンだ。

「まあ、いいさ」

「どうしたんです？」

「先に入っていよう」

「え？」

「外で待っているのも間抜けだろう。帝王は玉座で出迎えるものさ」

東は軋むドアをあけ、ガランとした店内に足を踏み入れた。玉座はどこだ。かつての俺の栄光を留める椅子を出してくれ。

そうして、一夜限りの王国の復活を、肅々と祝うのだ。

即興小説 セレクション

<http://p.booklog.jp/book/66062>

著者：片山るん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hyugarun/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/66062>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/66062>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ